

令和五年四月二日(日) 午後一時始め

第一回 大阪定期能楽公演

能

村雨 鶴澤 光

松風 立花香寿子

松風

旅僧 江崎欽次朗
間 浦人 善竹 隆司

大鼓 谷口 正壽
小鼓 清水 皓祐
笛 齊藤 敦

笠田 祐樹

後見 生一 知哉

梅若 雅一

梅若雄一郎 池内光之助
永田 克壬 梅若 堯之
上野 朝彦 梅若 修一
山田 薫 井戸 良祐

《休憩 15分》

十五時頃

狂言

(25分) 薩摩守

旅の僧 善竹彌五郎

茶屋 善竹 忠亮

船頭 善竹 忠重

後見 小西 玲央

仕舞

通盛

梅若 猶義

當麻

上野 朝義

融生

生一 知哉

《休憩 10分》

十五時四十五分頃

能

女御 梅若雄一郎

前山科菫司
後菫詞の亡霊

梅若 基徳

戀重荷

(70分)

臣下 福王 知登
間 下人 善竹 隆平

大鼓 山本 哲也 太鼓 中田 弘美
小鼓 久田舜一郎 笛 貞光 智宣

齊藤 信輔

後見 梅若 猶義

梅若 堯之

梅若 秀成 井戸 和男
上野 朝彦 山本 博通
笠田 祐樹 薫 上野 朝義
山田 薫 梅若 雅一

十七時頃

追加
終了予定

主催 大阪梅猶会

能 松風(まつかぜ)

諸国一見の旅僧(ワキ)が須磨浦で、謂われのありげな松を浦人(アヒ)に開くと松風、村雨の旧跡であると教えられ、日も暮れてきたので塩屋で宿を借りようと思ひ供養しながら待っているが、やがて海女(乙女達)シテ、ツシが汐を汲みながら帰ってきます。宿に招かれ、僧が在原行平の詠んだ和歌や松風、村雨のことを語ると二人は涙を流します。実は二人はその亡霊でした。行平がこの地に流されていた三年間は寵愛を受けていたが、都に帰った後も忘れられず、形見に残した烏帽子狩衣を見る度に思いは募るばかりと切実に訴えます。(物着)松風は形見の装束を身に纏い、村雨の制止も聞かず行平との昔を懐かしみ狂乱します。やがて夜も明け、僧に回向を頼むと彼女達の姿も消えて、残っているのは松風の吹く音のみでした。

この能は中人のない一場面ものですが、物語う行平への思ひな月下のもとに練りなす汐汲みの場面。恋慕う行平への思ひ。形見の装束を身につけた狂乱と三場面に分かれるのですが、とても長丁場で盛り沢山です。聞くところによると元々あったロングギまでの「汐汲み」という曲を観阿彌が改作し「松風村雨」に、更に世阿彌が改作し現在の「松風」に仕上げたようです。

狂言「薩摩守」(さつまのかみ)

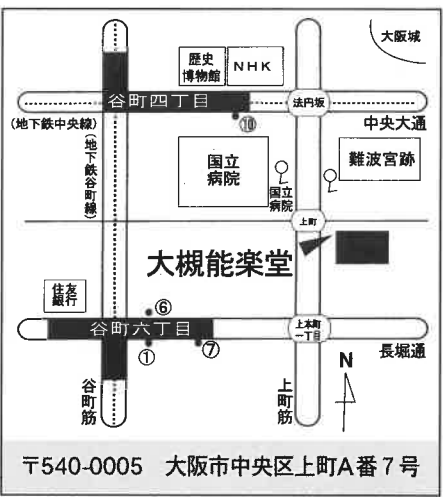
東国の若い修行僧が住吉天王寺へ参詣する途中、一軒の茶屋に立ち寄り休息します。茶代も持たずに「服した僧に茶屋は道中を案じ、この先にある神崎川の渡し舟に乗るには、かまりの船賃を支払わな」と乗せてもらえないので、教えてもらった「秀句」を使い、果たして渡ることが出来るのでしょうか...

薩摩守と言えば平忠度ですが、さてその意味する隠語は何でしょうか

能「戀重荷(こいのおもに)」

白河院の女御(ツシ)を垣間見て恋しいとなった庭園の菊の下葉取りの老人(山科狂司(前シテ)に対し、院の臣下(ワキ)は「庭に置かれた重荷を持って庭を何度も往復するならば姿を見せよう」という言葉伝える。狂司は喜び、重荷に手を掛けるが、荷は持ち上がらない。悲嘆に暮れた狂司は、女御への怨みを抱いたまま亡くなります。狂司の死を憐れむ女御と臣下でしたが、女御の体が金縛りで動かなくなってしまう。そこへ現れた狂司の悪霊(後シテ)は、女御に恨みの言葉述べると、彼女を責め苦しめます。しかし、狂司の霊は引つづけるなら、女御の守護霊となると消えていきます。

美しい女性に恋をしてしまった老人の、悲哀と恨みを描いた作品で、恋に隔てはないといながら、あらゆる希望を持たせたことが、恐ろしい悲劇を生み出しました。わずかな希望にする老人は忍心を無残に碎かれ、恨みの末に死に、怨霊となってしまう。しかし老人は恨みとおすことなく、最後は女御の守護神になると言います。報われずとも愛した人を支える道を選んだ老人の、「けなげさ」と「おそろしさ」二つの印象深いものがあります。



〒540-0005 大阪市中央区上町A番7号

第2回 予告

2023年9月3日(日)
午後1時開演
大槻能楽堂

能 礎 梅若 堯之
狂言 金藤左衛門 善竹 忠重
能 望月 井戸 良祐